

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 204号

2019年4月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (4)

第4講 妙行を中心として

妙行の意味

「妙行を中心として」という題は、…「妙」というのはとにかくありがたいということ、「行」は行ない、「妙行」というのは、そのことをすれば必ず救われる、そういうふうなことが聖書に二つ書いてある。それで私は、それを「妙行」と言ったのであります。

妙行の一つは、私は内村先生から聞いたのですが、「仰ぎ見る」、「主を仰ぎ見る」。仰ぎ見るというのはすでに、「モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子も挙げらるべし。すべてこれを仰ぎ見る者は救われる」という旧約の時代からの妙行であります。内村先生は昭和5年の3月にお亡くなりになりましたが、3月に私の知人である、先生の弟子が訪問した。ご病気は重かったが、先生はお会いになった。

その弟子が言うのに、先生お見受けするところ病期は重い、先生は

亡くなるかも分からん、ですのでから「最期に一分で基督教の教義を伝えてもらいたい」と言った。先生は、ああそうかと言って、先生は「キリストを仰ぎ見よ」と言われた。

その時には信仰という話もなく、望という話もなく、愛という話もない。「仰ぎ見よ」と仰せになりましたが、この「仰ぎ見よ」という字はロマ書には無い。ロマ書には「主の名を呼ぶ」「わが主イエスよ、主は救い主なり」と告白するという、わが主イエスと呼ぶ行がある。

何故主の名を呼ぶ行を取ったか

私は内村先生に学びましたが、この妙行の二つのうちでは、私は「主の名を呼ぶ」、「わが主イエスよ」と言う、名を呼ぶという行を取っている。

なぜ先生の弟子であるのに先生の行を取らずに、主の名を呼ぶという行を取ったかという、これは私の実家が浄土宗ですが、浄土宗では「南無阿弥陀仏」と言って、救い主の名を呼ぶ。これは私の家だけでなく、あるいは日蓮宗において「南無妙法蓮華経」と言って救いの力を持っている法華経の名を呼ぶ。これはもう日本においては、自分の救い主の名を呼ぶということは千年にわたって研究している。そうでありますので、私は妙行を選ぶときに、内村先生の「仰ぎ見る」という行を取らずに、「主の名を呼ぶ」という行を取った。特にこれはロマ書において、パウロが仰せになっておることありますから、私はこれを取ったわけであります。

私の一文「生きらば称名、死ねば天国」

内村先生は、自分の信仰を一つの文章でぱっと簡単に言い表せると、そうならなければ力にならないと言われた。先生の信仰は今言うとおりに、主を仰ぎ見よということなのだ、先生の一言は。

先生にならしまして、先生の弟子ですからなるべく先生のまねをしたいと思うんですが、私の一言は「生きらば称名、死ねば天国」、これが私の一文。生きていたら主の名を呼ぶ、「わが主イエスよ」と言う。死んだら天国。今司会者に読んで頂きましたヨハネ伝 14 章 3 節、はっきり書いてある。キリストが、お前らが死ぬときに私が迎えに行くと。そして私のおる所に、天国にお前もおらせると、ヨハネ伝 14 章 3 節に書いてある。私はそれを信じまして「生きらば称名、死ねば天国」、これが私の一文であります。

生きらば称名、このままで…

これをもう少し引き伸ばしますと、「生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる。そのときの喜び、言葉をもって述ぶべからず」と、こう伸ばすことが出来る。この文章は私の、自分のことはちっとも無い。「生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる。その時の喜び、言葉をもって述ぶべからず」。私は毎日これを言って、これを毎日実行したいと思っています。小さい範囲でそれを実行させて頂いているのですが、この文句の中で、私の考えと
いうのは一つもない。

目の前のなすべきをなす

「生きらば称名」と言うのは、これはパウロの称名、パウロの考え。「このままで」というのは、私の尊敬します恵心僧都のお言葉に、妄念のままで念仏せよと、妄念のままで称名せよという言葉がある。

「妄念のままで」という字がある。その精神を取りまして「このままで」となる。「このままで」というのは自分の発明ではなしに、これは、“Just as I am”という英語から来ている。“Just as I am”、自分になにも足す必要はない。そのままで、あるがままでやる。

「目の前のなすべきをなす」と言うのは、これは私の考えでない。これは今先生に読んでいただきました、ロマ書の有名な 12 章の初めの精神です。すなわち教える者には教え、説教する者は説教して、与えられた恵みにおいて説教をせよと言った。すなわち自分の置かれた仕事、自分の前に置かれた義務をまずするということ。ですから、自分のしたいことをするのではなくして、目の前の自分のなすべきことをなす。これは私の考えではなくて、パウロの考え。

死ねば天国、キリストに迎えられる

それから「死ねば天国、キリストに迎えられる」と、これはヨハネ伝 14 章 3 節の精神。

それから、「その時の喜び、言葉をもって述ぶべからず」。これは恵心僧都の有名な『往生要集』という著書がありますが、その著書に明記されているのですが、すなわち死んで救い主の国阿弥陀仏の国に生まれるとき、「その時の喜び、言葉をもって述ぶべからず」と源信・恵心僧都は言った。私はその精神を取りまして、すなわち「死ねば天国、キリストに迎えらる。そのときの喜び、言葉をもって述ぶべからず」と、そうとったわけであります。

私のキリスト教

私の信仰について、毎日の行いについて申しあげた。それをもう一遍簡単に申し上げれば、これは心と口と手、三つに分かれているわけでありますが、心では、自分の行ない、自分の信仰によって救われるのではない、ひとえにイエス・キリストの復活の贖いの御功によってわれらは救われて永遠の命を与えられると、心ではそう思う。口では、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶ。手では、自分の目の前に来るなすべきこと、自分のなしたいことではなしに、自分のなすべきことをなす。心と口と手、それが私のキリスト教。

くどいけれども言えば、

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えらる。そのときの喜び、言葉をもって述べべからず。

これが私のキリスト教であります。

贖いには二つの意義がある

贖いには二つの意義がある。ロマ書 10 章 9 節の前半、すなわち神がイエスをよみがえらせた。すなわちイエスを十字架につけて、イエスを復活させて、そして我々の罪とがを贖うて、贖いを成就した。9 節の前半、これが贖いの第 1 の意義です。贖いの第 1 の意義は、われわれがイエス・キリストの復活によって贖われたという、これが信仰の客体なのである。何を信ずるかと言えば、これを信ずる。これが贖いの第一義。

第 2 の意義は、9 節の後半、すなわちイエスを主なりと告白する。これが 9 節の後半になっておりますが、これが贖いの第 2 の意義。この第 2 の意義は、すなわち贖いの信じ方を示している。贖いを信ずるとはどういうふうに信ずるかという、信じ方を示している。信じ方は、「わが主イエスよ」という、そして信ずる。主の名を呼ぶということが、How to believe、いかに信ずるかということ、方法を示している。よろしいか。

私の願いと祈り

今度は第 2 に、私の願い、願望を申し上げます。私は、今日のこの第 30 回のクリスマスをきっかけと致しまして、人に説教することはやめます。これからは私自身に説教したい。毎日曜、人に話をする機会があれば、それはその人に話しするのではなくして、自分自身に話しているものをご理解願いたい。

それは内村鑑三先生が、日本に本当のキリスト信者が一人できたら、日本の国は改まると言った。私は先生の弟子ですから、少なくとも先生が希望しておられるような本当の信者になりたい。…

第 3 には、最後に私の祈り。神様に祈ります。祈りは、私が死にまして、死んだあと 25 年間の間に二人の人が、普通の人、学者だとか偉い人でない普通の人で、平信徒の伝道者で二人の人が、私が死んでから 25 年間の間に二人の人が伝道者になってもらいたい。そしてそれは、自分の家で伝道を始めてもらいたい。丁度石館先生がこの家で伝道をお始めになっておるようなものです。自分の家で、初代教会のように自分の家で伝道を始めてもらいたい。

25年で二人の伝道者

私は私の生きている間、信仰の友人を求めない。一人も信仰の友人を与えられなくともいい。現在この私が生きている間に、信仰の友人を得ようという考えを、持っていない。それは聴きに来てくれたらいいですよ、うれしいですよ。聴きに来てくれたらうれしいけれど、私は君たちに求めている。私は死んでから 25 年の間に、平信徒の伝道者が自分の家で二人、伝道者が出てくれたらありがたい。

私、一寸計算してみた。その二人が出るような、そういうふうな私は信者になりたい。私の弟子から二人伝道者が出るような伝道者になりたい、私は。死ぬまで、これから勉強する積りでしています。

それを計算しますと、500 年後には 100 万人できる。100 万人以上になる、500 年後には。ですから私もこれから勉強して、キリスト教の信仰を分からせてもらえる可能性があるんですよ。本当のキリスト教徒はどういうものかということを知る可能性はある。

500年たったら 100万人の伝道者

また私がもしその可能性があって死んだら、また二人弟子が出る可能性はあるんですよ。それがもし可能性があるとすれば、その可能性が行けば、500年たったら100万人、100万人の伝道者ができる。100万人の伝道者が出来たら、日本の国は変わる、確かに。

私は500年は長いと思わない。私の最も尊敬して、最も真剣に読む本はロマ書です。2000年前に書かれた本です。その次に読むのは源信・恵心僧都の書かれた文章。これは900年前に書かれた文章。だから1000年、2000年、900年は問題になりません。そんなものは問題にならない。

「古今に通じて^{あやま}謬らずこれを中外に施して^{もと}悖らず」(注)と明治天皇は言った。私の祈りは、私の死後25年の間に親しい伝道者2人。それも学問のない普通の大工、漁夫が望ましい。

(注) 教育勅語の言葉